

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

陰陽師Ⅱ

配給/東宝

2003 (平成15) 年9月5日鑑賞

<東宝試写室>

Data

監督: 滝田洋二郎

原作: 夢枕獏

出演: 野村萬斎 / 伊藤英明 / 中井貴一 / 深田恭子 / 市原隼人

👁️👁️ みどころ

ご存知、野村萬斎がカッコいい安倍清明を演ずる陰陽師シリーズの第2弾。今回は大和国と出雲国の対立がテーマ。アマテラスとスサノオという日本人なら誰もが知っている日本神話をうまく使って、奥の深い、面白いストーリーに仕上げている。パートⅢにも期待がもてる。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<大ヒットした『陰陽師』に続くパートⅡ>

2001年に公開された野村萬斎主演の『陰陽師』は、興行収入32億円、観客動員220万人、2001年映画興行成績第1位(邦画ライブアクション部門)と大人気を博した。また主演の狂言界のプリンス野村萬斎は、第44回ブルーリボン賞主演男優賞、第25回日本アカデミー賞新人俳優賞、同主演男優賞をダブル受賞した。原作も大ヒットし、日本列島に「陰陽師ブーム」が到来したことは周知のとおりだ。

<『陰陽師Ⅱ』を理解する為の8つのキーワード>

『陰陽師Ⅱ』は、その人気の上に、陰陽師としての安倍清明を主演に据えた作品だが、そのストーリーは第1作とは全く関係がなく、出雲の国の神話がテーマだ。『陰陽師Ⅱ』は勉強が必要で、この映画を本当に楽しむためにはパンフレットにも書かれている「出雲神話」を理解し、いくつかのキーワードを学ぶことが大切だ。パンフレットに説明してある8つのキーワードとは、①日隠れ(ひがくれ)、②八掛(はっけ)、③出雲国(いづものくに)、④アマテラス、⑤スサノオノミコト、⑥アメノムラクモの剣、⑦天岩戸伝説(あまのいわとでんせつ)、⑧天御社(あめのみやしろ)だ。

<歴史のお勉強>

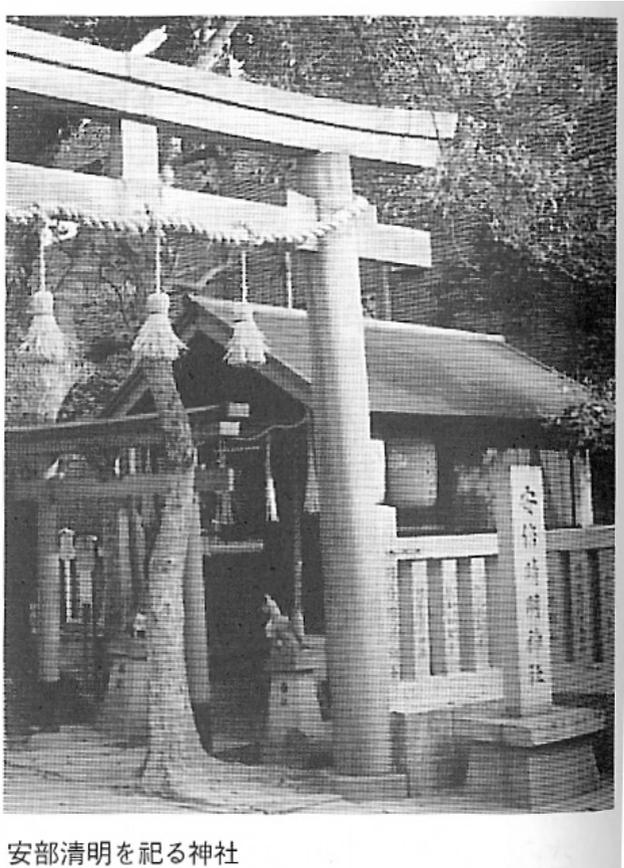
詳しくは映画を観てもらいたいですが、③～⑧は歴史上必要な知識。その中で大切なことの第1は、「古事記」や「日本書紀」に書かれている日本神話で最も有名な神様であるアマテラス（天照大御神）とスサノオ（素戔嗚尊）の物語に興味をもつこと。第2は、「大和国」が「出雲国」を滅ぼしたという怨念のストーリーを理解すること。

この2つを理解しなければ、安倍清明（野村萬斎）の向こうを張る陰陽師の幻角（中井貴一）の存在意義、そしてその娘日美子（アマテラス）（深田恭子）とその弟須佐（スサノオ）（市原隼人）の役割や苦しみが分からないことになってしまう。それでは、この作品を楽しく観ることは出来ないし、興味や楽しみも半減してしまうだろう。

<天文学と陰陽のお勉強>

次に、①の「日隠れ」とは、太陽が黒くなる「（皆既）日蝕」のこと。日本では平安時代の975年、つまり安倍清明が生きていた時代に最初に発生したとのこと。天文学的知識がゼロのこの時代に、この「日蝕」が「悪きこと」の前兆として恐れられ、鬼の登場に結びついたことは容易に想像できる。

難しいのは、②の「八掛（はっけ）」。これは陰と陽を示す八角の形をした八つの言葉と八つの大罪のことだが、実は私もこれ以上はよく分からない。しかし少なくともこの程度の理解は不可欠だ。



安倍清明を祀る神社

<中井貴一と伊藤英明の存在感>

陰陽師であり、かつ、出雲国の王であった幻角を演ずるのは、『壬生義士伝』（03年）で新撰組隊士、吉村貫一郎を熱演した中井貴一。下手をすれば「マンガ」になりかねないこの難しい役を重厚に演じ、前述したちょっと難しい歴史上の事実をうまく観客に納得させているのはさすが。

他方、第1作に続いて安倍清明の無二の親友、源博雅を演ずるのは伊藤英明。『陰陽師Ⅱ』では、殿上人でありながら純真な心を失わず、安倍清明と共に生命を賭した闘いに挑むカッコいい役。コミカルさは維持したまま、キリッとした存在感をもたせている。

さらに『陰陽師Ⅱ』で特筆すべきは、源博雅のミュージシャンとしての能力。彼の吹く横笛（龍笛）と須佐の弾く琵琶との二重奏（デュオ）の美しさは特筆モノ。そして彼の横笛（龍笛）の人の心を打つ美しさは、鬼の心にも訴えかけ、結果的に安倍清明を助けるほどの役割を果たすことになる。

<市原隼人と深田恭子の熱演もお見事>

琵琶を弾く美少年の須佐（市原隼人）は大忙し。美少年から何回も鬼に変身し、人の肉を食らったり、人と鬼とのハザマで苦しんだり、ストーリーの展開上重要な役割を果たす。そして最後には出雲国の王として、大和国を滅ぼす（？）大役までこなしている。もっとも最後は、スサノオとしての恨みを捨てて姉のアマテラスの元に戻り、ハッピーエンド。

深キョンこと深田恭子が演ずる日美子は、最初は藤原安麻呂（伊武雅刀）の娘という設定だが、実は……。この日美子の出生の秘密が少しずつ明らかになりながら、歴史のお勉強をするところが何とも楽しいところ。その種明かしをすべてここでしてしまっただけは興味半減となるため、これ以上の解説はやめるが、深キョンの演技も、まわりの芸達者な役者たちに引きずられて、まずまずの熱演。よく頑張ったとほめてやりたい……。

<パートⅢ、パートⅣの予感>

陰陽師、安倍清明の基本キャラクターは結構面白いし、いろんな方面に肉付けすることが可能。その上、コンピューター・グラフィックの技術を駆使するのに適した題材だから、今後いくらかでも面白くストーリーをつくっていきける可能性がある。

『陰陽師Ⅱ』の出来は、第1作と比べても遜色ないものだ。問題は、この陰陽師というテーマ自体がいつ飽きられるか、ということだけ。陰陽師への興味が続く限りは、この『陰陽師Ⅱ』はヒットするだろうし、パートⅢ、パートⅣにも期待できるというものだ。

2003（平成15）年9月6日記